



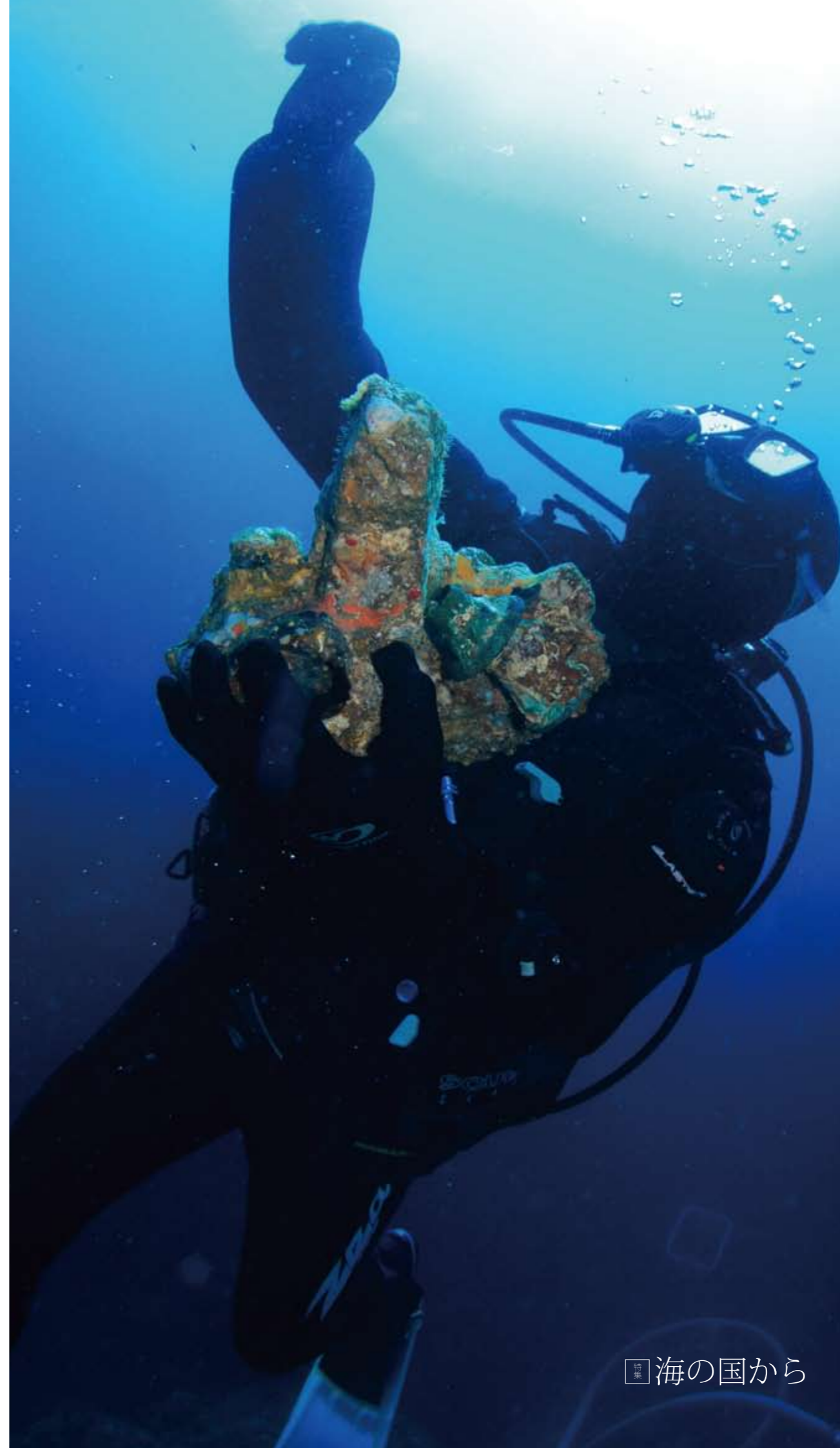
トルコ記念館／エルトゥールル号殉難将士慰霊碑の近くに昭和49年に建設された記念館。引揚げられたエルトゥールル号の遺品や、沖村長の日記などが展示されている。  
住所／東牟婁郡串本町樫野1025-26  
電話／0735-65-0628  
入場料／250円(小学生以下120円) 営業時間／9:00～17:00  
定休日／なし



トルコ記念館に展示されている「大島村村長、沖周の日記」。当時の救助活動の様子が克明に描かれている貴重な資料。



沈没地点の舟甲羅周辺から、最近引揚げられた蛇口と剣の柄。エルトゥールル号に装備されていた大砲など大型の金物は、沈没直後、日本政府によって引揚げられ、本国オスマン帝国に送り返されている。トルコ記念館展示。



当時の日本は急ピッチで近代化が進み、1884年から発表されるようになった天気予報の精度は既に70～80%※という正確さであった。予報は的中、エルトゥールル号は嵐に遭遇、樫野埼灯台近くで座礁し、機関が爆発沈没してしまう。

「翌朝、事故の連絡を受けた大島村の村長沖周は、郡役所と県庁に連絡、同時に村に住む3名の医師に治療を指示、島民を総動員し、救難活動の陣頭指揮を執った。など、その当時の状況は沖村長の日記に克明に記録されています。」と語るのはエルトゥールル号を様々な面から研究する、東洋大学三沢伸生准教授。

堀口氏は「当時、樫野地区には60戸程度の民家があり、ほとんど全員が救難活動に携わったそうです。女性や子どもたちは炊き出しや看護を行い、男性は海岸に降り生存者を見つけては帯で背中に縛り付け、急な崖を担いで上ったそうです。そして食料として自分たちの貴重な米やサツマイモ、ニワトリを分け与え、ずぶぬれの生存者に浴衣を着せ、それでも寒さに震える異国の男たちを抱きしめ暖めたそうです。」と、母親から聞いた話を聞かせてくれた。

その後生存者69名は、神戸から送還され

るはずであったが、日本政府も財政難で単には艦を出せない。しかし、新聞各社の義援金募集活動により5千円(現在の価値で約2千万円)の義援金が集まり、その義援金を携えた民間人を乗せ、軍艦「金剛」と「比叡」がトルコを目指した。

その後、治療にあたった3人の医師に治療費などが支払われることとなるが、医師たちは「我々は当然の事をしたまじだ。そのお金は、遺族の方のためにお使いください。」と申し出たと言う。

慰霊碑周辺はいつも清々しい。「エルトゥールル号の悲劇」から120年経った今も、大島小学校の生徒やボランティアたちが清掃活動をしているという。トルコと日本の交友は、間違いなく今も続いている。

※資料=1890年エルトゥールル号事件報告／中央防災会議発行



樫野埼灯台近くに建つ、エルトゥールル号殉難将士慰霊碑。エルトゥールル号の悲劇は、120年経った今も大島小学校の授業で語り継がれている。また生徒たちは定期的に慰霊碑周辺を清掃している。

水深15メートル程の発掘現場から浮上するトルコ海底考古学研究所元所長トウファン・トゥランルさん。手に持っているのは経年変化により固まっているエルトゥールル号の真鍮製品や釘、銃弾などが組み合わさった遺物。

# その後、120年に渡るトルコとの交友の証し。 島民たちの情愛が奏でる 紺碧の海の鎮魂歌。